

あきたからの米レター

栄養診断を行い、適切な肥培管理を！

穂肥の際は、第4～5節間の長さも確認し、倒伏に注意！

いもち病の発生に注意、適切な防除を！

1. 県内の生育状況

(1) 各地域の生育状況

幼穂形成期にあたる7/14調査においては、全県で草丈67.5cm（平年比105%）、茎数484本/㎡（同91%）、葉数11.3葉（平年差+0.1葉）、葉緑素計値43.3（平年比103%）となっており、草丈が長く、茎数が少なくなっています。

減数分裂期にあたる7/25調査においては、全県で草丈81.1cm（平年比108%）、茎数448本/㎡（同91%）、葉数12.6葉（平年差+0.3葉）、葉緑素計値41.0（平年比105%）となっており、幼穂形成期同様、草丈が長くなっています。

7月上旬に続き、7月中旬以降も最低気温が平年より高く推移し、気温日較差が小さかったことや、日照時間が少なかったことから、草丈が長くなりやすい天候であったことが要因と思われます。

現在、“あきたこまち”は減数分裂期を迎えています。早いところでは走り穂が確認されている圃場もあります。幼穂形成期における栄養診断では、圃場によりバラつきが見られ、追肥が必要な圃場もあります（図2）。圃場ごとに栄養診断を実施し、適切な肥培管理を行いましょう。なお、過剰な追肥や減数分裂期を過ぎてからの追肥は、玄米のタンパク質含有率を高め、食味の低下につながるため、行わないようにしましょう。

表1 県内の生育状況（7/14、各地域振興局調査）

品種	地区	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年	前年比	平年比※1	本年	前年比	平年比	本年	前年差	平年差	本年	前年比	平年比
		(cm)	(%)	(%)	(本)	(%)	(%)	(葉)				(%)	(%)
あきたこまち	県北	68.5	99	108	500	115	91	11.4	-0.2	0.2	43.9	107	106
	中央	69.2	94	106	491	119	101	11.4	-0.4	0.2	41.8	99	101
	県南	66.0	97	103	468	101	88	11.2	-0.1	0.1	43.4	103	101
	全県	67.5	97	105	484	109	91	11.3	-0.2	0.1	43.3	104	103
ひとめぼれ	中央	67.9	94	106	569	105	101	11.4	-0.2	0.2	35.5	96	93
理想生育量※2 (7/14)	県北	62	60	57	586	552	519	11.0	10.8	10.6	42	40	39
	中央	63	61	58	559	515	471	10.9	10.7	10.5	44	42	40
	県南	64	62	60	484	463	443	11.0	10.9	10.7	43	42	41

※1 平年値：平成22年～令和元年までの過去10年平均

※2 各項目、左から上限値、理想値、下限値

表 2 県内の生育状況（7/25、各地域振興局調査）

品種	地区	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比※ ¹ (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	82.3	106	111	457	108	90	12.6	-0.1	0.1	41.3	106	109
	中央	82.3	98	107	461	114	102	12.6	-0.2	0.2	39.1	99	102
	県南	79.8	101	106	436	98	88	12.5	0.1	0.3	41.6	103	104
	全県	81.1	102	108	448	104	91	12.6	0.0	0.3	41.0	104	105
ひとめぼれ	中央	79	97	106	546	102	102	12.4	-0.2	0.2	34.6	99	96
理想生育量※ ² (7/25)	県北	74	72	69	529	504	479	12.2	12.0	11.8	40	39	38
	中央	72	70	69	527	491	456	12.2	11.9	11.7	39	38	36
	県南	75	74	72	454	437	420	12.5	12.3	12.1	39	38	37

※1 平年値：平成22年～令和元年までの過去10年平均

※2 各項目、左から上限値、理想値、下限値

なお、地域別の生育状況は表3のとおりとなっており、北秋田・平鹿・雄勝地区で**茎数が平年よりやや少なくな**っています。

一方で葉色は平年より濃くなっていますが、由利地域では葉色の低下が見られます。今後、**急激な葉色の低下**に注意が必要です。

表 3 各地域の生育状況（7/25、各地域振興局調査）

地域	草丈		㎡当たり茎数		葉数		葉緑素計値	
	本年 (cm)	平年比 (%)	本年 (本)	平年比 (%)	本年 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	平年比 (%)
鹿角	77.6	107	508	95	12.8	0.5	40.9	108
北秋田	82.3	110	444	88	12.6	0.0	40.1	107
山本	84.8	114	442	90	12.6	0.2	42.6	111
秋田	84.5	108	459	102	12.7	0.2	40.0	105
由利	72.6	102	472	103	12.0	0.2	34.8	89
仙北	79.8	108	438	90	12.6	0.5	42.0	109
平鹿	79.3	104	429	87	12.5	0.2	41.5	102
雄勝	80.4	107	444	88	12.4	0.1	41.4	103

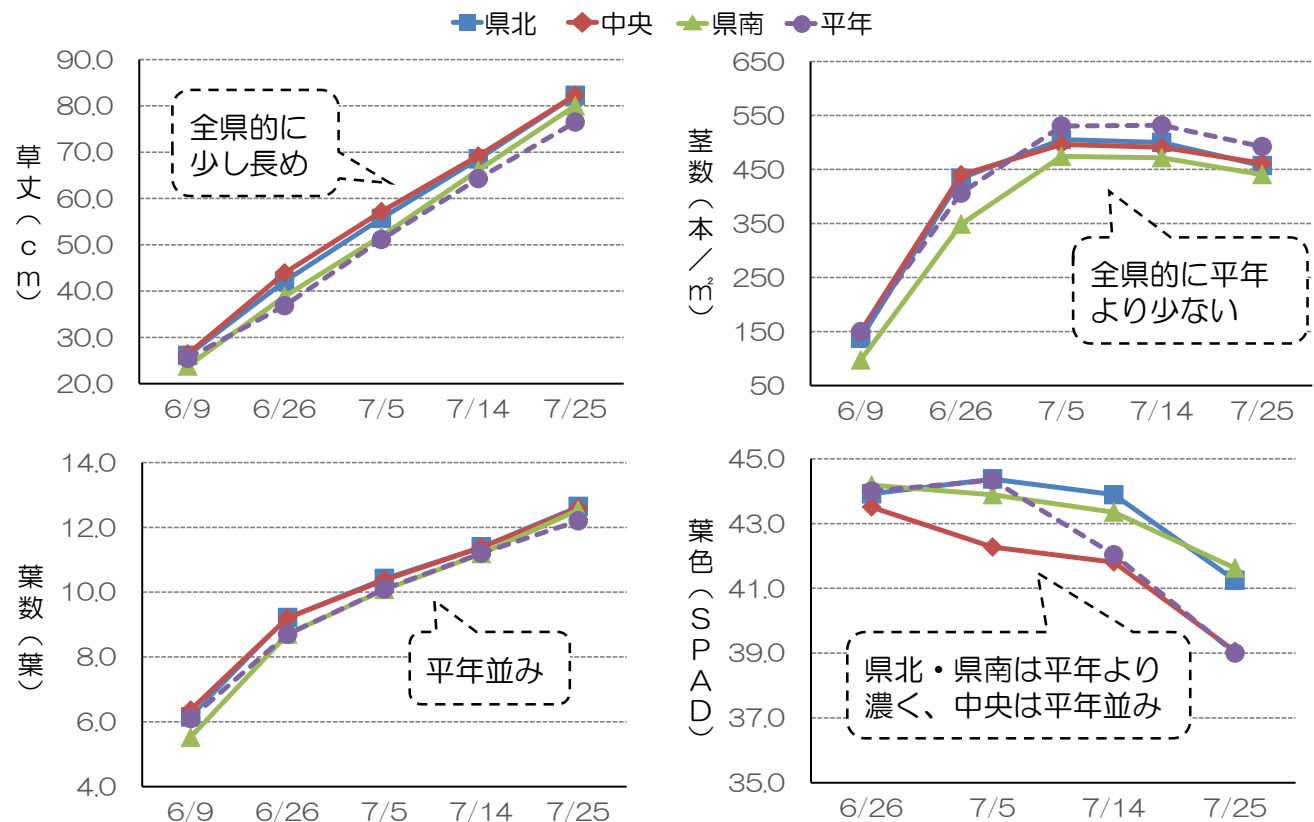


図 1 地域ごとの生育の推移（左上：草丈、右上：茎数、左下：葉数、右下：葉色）

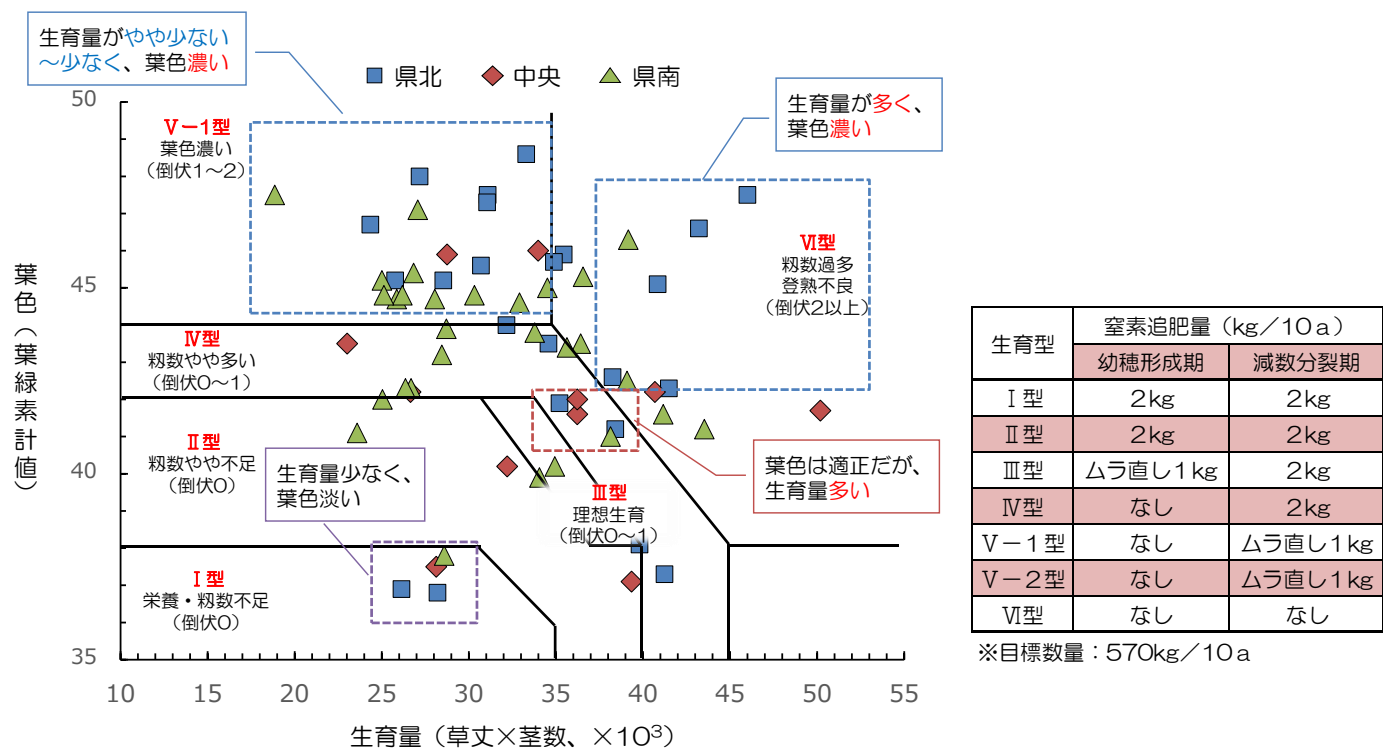


図 2 幼穂形成期における栄養診断と追肥量

表 4 秋田市の気象統計値（秋田地方気象台発表資料より抜粋）

		気温 (°C)			降水量 (mm)			日照時間 (h)		
		平均	平年差	平年との比較	降水量	平年比 (%)	平年との比較	積算時間	平年比 (%)	平年との比較
7月	上旬	23.6	+1.5	高い	27.5	36	少ない	40.9	88	平年並
	中旬	23.7	+0.6	平年並	385.5	580	かなり多い	18.5	40	かなり少ない

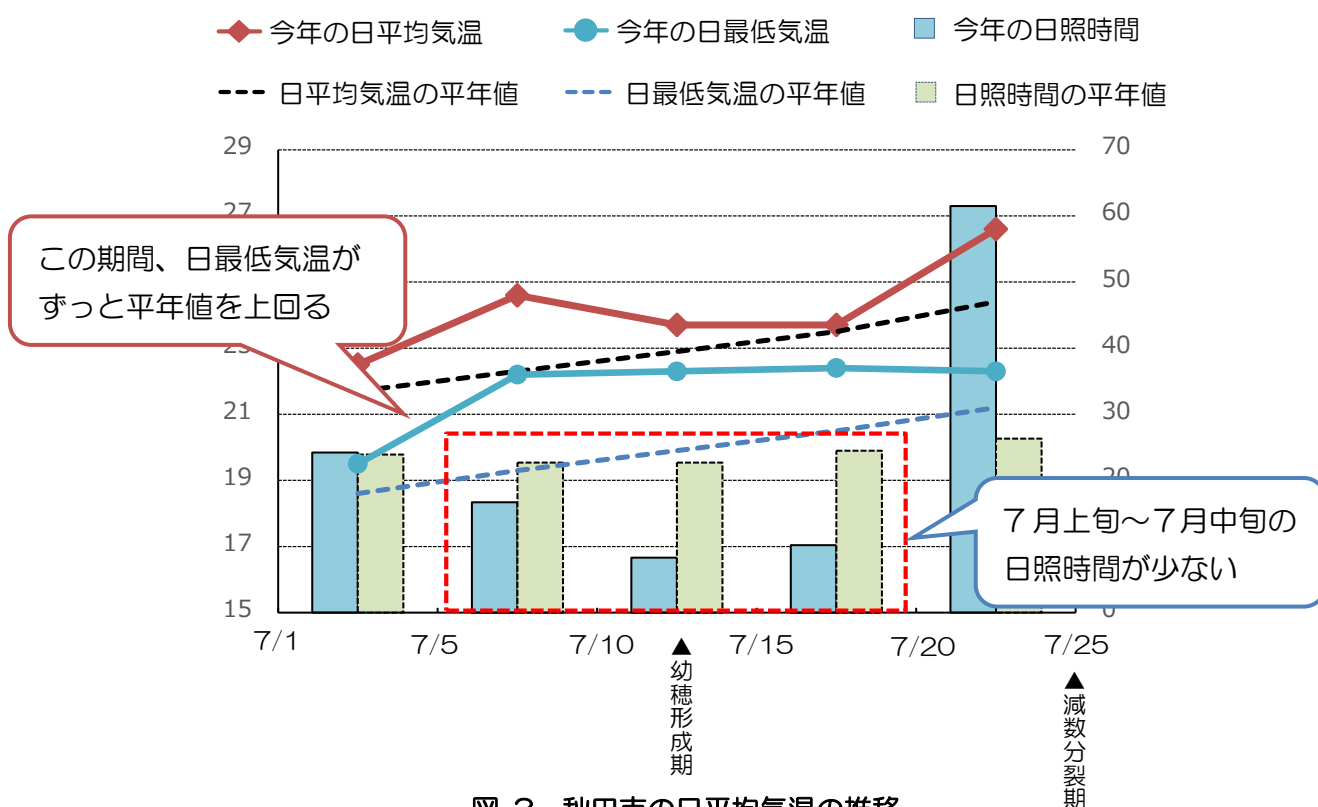


図 3 秋田市の日平均気温の推移

減数分裂期の追肥は、下位節間の長さに注意！

第 n 葉が伸長する時、 $n-2 \sim n-3$ 節間が伸長する



<止葉が**13枚**の場合>

11.1～12.0 葉の時 → 第5節間が伸長

12.1～12.9 葉の時 → 第4節間が伸長

<止葉が**12枚**の場合>

10.1～11.0 葉の時 → 第5節間が伸長

11.1～11.9 葉の時 → 第4節間が伸長



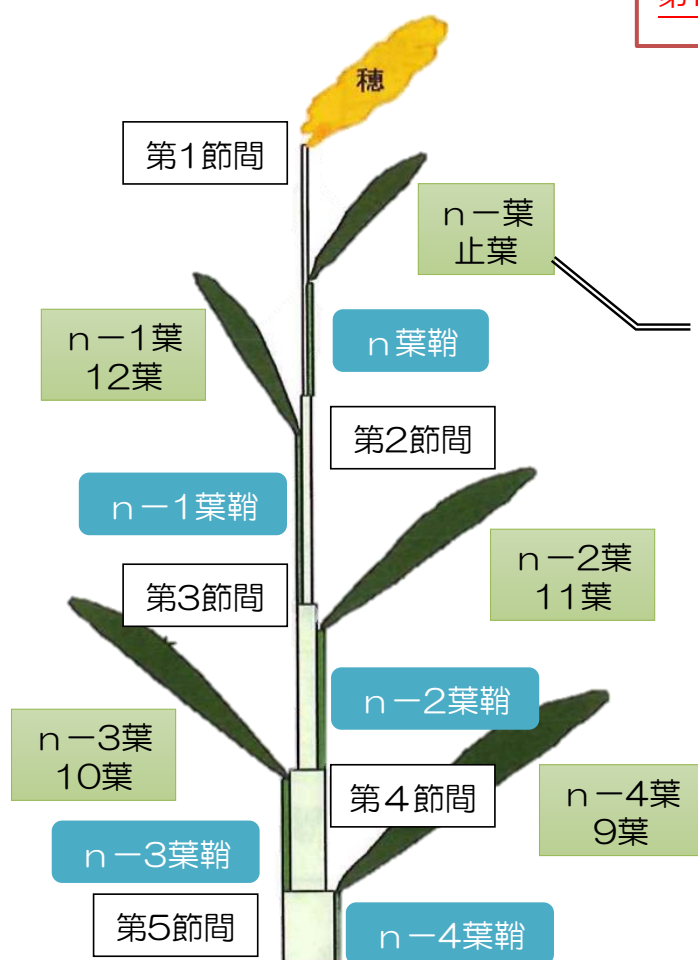
幼穂形成期…第5節間の伸長が終了

減数分裂期…第4節間の伸長が終了



減数分裂期盛期

→第4～第5節間の長さが計測できる



第4～5節間の長さが**15cm**を超える場合

→幼穂形成期の栄養診断で減数分裂期の追肥が可能であっても、

倒伏の可能性があるので、注意が必要！

あちーーーーっ！
アイス食いてえ！



暑くても、イネはぐんぐん成長！
(JA 秋田おばこ管内、サキホコレ)



2. 今後の圃場管理

- (1) 水管理：減数分裂期は低温に最も弱く、日平均気温が 20℃以下では障害不稔を発生する恐れがあります。低温時は水深 15cm の深水管理を行いましょう。

★減数分裂期とは：葉耳間長±0の主茎が半分
以上見られる頃で、一般的に
出穂期前 10～15 日頃。

- ① 幼穂形成期～出穂までは、稲体の活力維持のため、間断かん水が基本です。今年は雨の日が続き、中干しを十分にできなかった圃場もあるので、その場合は落水期間が長めの間断かん水を行い、田面の硬度を確保して下さい。
- ② 出穂期は稲が水を最も必要とする時期です。出穂後 10 日間は湛水状態を保ち、水を切らさないよう管理しましょう。

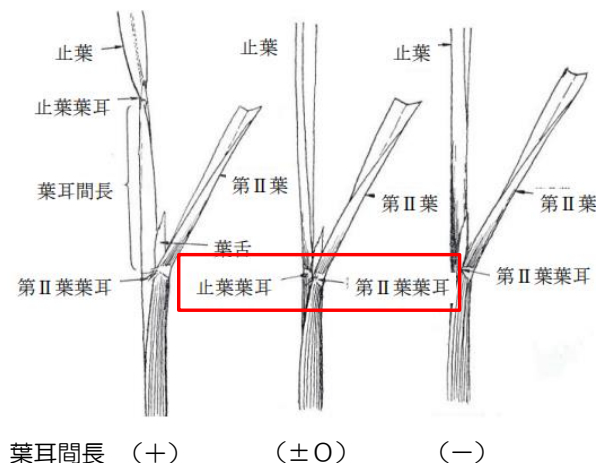


図 4 葉耳間長の見方

（新潟県関川村他発行「水稻栽培の基礎知識」より抜粋）

表 5 あきたこまちの出穂期予測（中苗移植）

地域	田植え盛期	アメダス 観測地点	減数分裂期	出穂期
県北	5/20	大館	7/24 頃	8/2 頃
中央	5/18	大正寺	7/24 頃	8/1 頃
県南	5/23	横手	7/22 頃	7/30 頃

■大雨による冠水・浸水被害を受けた圃場の対策■

7/14～16 日の大雨により、冠水・浸水した圃場では、**稲体が弱っているため病害の発生**に特に注意が必要です。茎葉に付着した泥は、排水された後の断続的な降雨で大部分は洗い流されていますが、吸水・蒸散機能に障害が残っている場合もあるため、急激な土壌の乾燥は避けましょう。

(2) 病虫害防除

- ① いもち病防除：県内で葉いもちの発生が多く確認され、穂いもちが多発するおそれがあることから、7/26 日付で、秋田県病虫害防除所が注意報を発表しました。育苗箱施用剤や側条施用剤等で葉いもち初期防除を行った圃場でも、現在はその効果は切れています。圃場内を確認し、いもち病の発生、特に上位葉での発生が見られた場合は、**穂いもち防除を徹底**しましょう。

葉いもちの発生は、特に県北部で多いようです（表6）。

表7に防除薬剤一覧を示しましたが、薬剤の使用に当たっては、ラベルを確認し、総使用回数や散布時期に注意し、正しく使用しましょう。

今年は出穂が早まることが見込まれていますので、防除時期を逸しないように注意しましょう。



葉いもち



穂いもち

表 6 抽出圃場における葉いもちの発生状況
(7/26 発表、病害虫発生予察情報注意報第1号より抜粋)

	葉いもち 発病株率	葉いもち 発病地点率	上位葉葉いもち 発病株率	上位葉葉いもち 発病地点率
県北部	5.3 (1.6)	25.0 (13.3)	2.2 (0.1)	8.3 (2.2)
県中央部	2.2 (1.4)	4.2 (8.4)	0 (0.1)	0 (1.2)
県南部	2.5 (3.6)	9.4 (18.1)	0.5 (0.1)	3.1 (1.9)
全県	3.0 (2.4)	12.5 (13.6)	0.7 (0.1)	3.8 (2.1)
概評	並	並	多	やや多

()は平年値

表 7 穂いもち防除薬剤一覧（7/26 発表、病害虫発生予察情報注意報第1号より抜粋）

農薬名	粒剤	粉剤DL	ゾル・フロアブル	散布時期	散布量／10aまたは希釈倍数 【散布液量／10a】
コラトップ1キロ粒剤12	○			出穂15～7日前	1～1.5kg
コラトップ豆つぶ					250g
コラトップ粒剤5					4kg
ゴウケツ粒剤	○				4kg
トライ剤			○	出穂直前 穂揃い期	粉剤DL：3～4kg ゾル・フロアブル： 1,000倍【100～150L】
ビーム剤		○	○	出穂直前	
ラブサイド剤		○	○	穂揃い期 傾穂期	

※1 粒剤は湛水状態で田面に均一散布をし、散布後4～5日間は水を入れない。また、散布後7日間は落水・かけ流しはしない。

※2 茎葉散布剤を散布した後、数日以内の積算降水量が液剤の場合200mm、粉剤の場合100mmにならなければ再散布不要。

※3 傾穂期以降のビームゾルの散布は、葉の黄化や葉先枯れなどを生じることがある。これは有機リン剤、カーバメート剤等との混合によって助長されるので、この時期、本剤の使用は避ける。

- ② 斑点米カメムシ類：農道・畦畔等の草刈りは稲の出穂 10 日前までに地域一斉に行い、その後は出穂 10 日後のスタークル剤散布当日～散布後 7 日後までに実施する。

水田内にノビエやホタルイの残草がある場合や、斑点米カメムシ類の発生源となる休耕田等に隣接している場合は、出穂 24 日後頃にエクシード剤またはキラップ剤の散布を行う。

7月14～16日にかけて、県内を襲った大雨。被害に遭われた皆様には、お見舞い申し上げます。産地米情報も第3号となりましたが、毎回、大雨被害のお話しばかりしているような気がします。秋田市では梅雨入りの6/11～7/21までの降水量が506mm（平年242.5mm）と、平年の2倍以上になったようです。本当に、気象変化が激しいですね…

さて、つい最近梅雨入りしたかと思えば、7/22に平年より6日早い梅雨明けが発表され、ついに夏本番を迎えました。連日、暑い日が続いていますね。

先日、生育調査を行ったのですが、朝方の比較的涼しい時間に行ったにもかかわらず、汗が滝のように流れてきて、600mLの麦茶は秒でなくなりました。これからもっと暑くなります。

皆様も熱中症対策はしっかりと行って、農作業に当たって欲しいと思います。

秋田でも“高温障害”という言葉が、今では当たり前のようになってしまった現在ですが、良食味米生産に向けて、もうひと踏ん張り、頑張りましょう！

なべ

全国農業協同組合連合会 秋田県本部

〒010-8558 秋田市八橋南 2-10-16

U R L : <https://www.zennoh.or.jp/ak/>

★次回の発行は8/15頃

資料の使用にあたっては、
米穀部の許可を得てください



J A全農あきた 米穀部

〒011-0901

秋田市寺内字神屋敷 295-53

T E L : 018-845-8500

F A X : 018-880-1572